

a 学校教育目標	学びに向かい、心豊かで、健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校
----------	--	----------------------	--

評価計画				自己評価				改善方針			学校関係者評価				
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント	
					達成値	達成値					イ	ロ	ハ		
確かな学力	確かな学力の育成(かしこく)	○対話を生み出す課題づくり ○「児童の思考を促す」、「対話を生かす」等の視点による授業評価票を活用した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握、分析、改善策検討	○授業評価票「思考を促す」「対話を活かす」評価項目の平均ポイント3以上の職員割合 ○児童アンケートの肯定的評価の割合	8月80% 1月85%	100%	91%	120.0%	A	・授業評価票の結果は肯定的評価が100%であった。各授業者が児童から課題を引き出し、児童の思考・対話を促すことができた結果だと考えられる。どの研究授業においても、児童の考えを引き出す切り返し発問や、思考を促さぶる発問などが意図的になされている。 ・児童アンケートの肯定的評価の割合は91%だった。目標値は達成しているが、特に高学年において肯定的な割合が低い傾向が見られる。学習の仕方について自信をもてない児童がいると考えられる。 ・週に一度朝の帯タイムに各学年で実施しているソーシャルスキルトレーニングにおいて、相手とのコミュニケーションの取り方を学習していることも、理由の一つと考えられる。	・今後も、各授業者が児童の学びたいという思いをもとに課題を引き出し、対話を通して児童同士の学び合いが行われるよう授業をファンデーションしていく必要がある。担任からは、年度当初に比べ、児童が自分の考えを持つことができるようになった、対話ができるようになってきたという意見が出ているため、取組を継続し、更に授業改善を図っていく。 ・児童アンケートの算数科に関する3項目の中で、「これまでに学習したことを使って考えたり、友達の意見と自分の意見を比べたりしながら考えていますか。」の肯定的評価が最も低かったため、授業の中で、より既習事項の活用をより意識できよう授業改善を図っていくようにする。また、対話の型を示すことで徐々に対話ができるようになった学年もあるため、自分の考えと相手の考えを比べた発言の仕方を示し、活用させていくことで、児童が「できた」という実感をもつことができるようにする。	○			・児童の学習意欲を高めようとしていることが伺える。 ・学ぶことが楽しいと感じられる児童をこれからも増やしてほしい。 ・児童同士の対話を大切にしながら授業改善に努めているのがよい。 ・児童同士が対話をする際、机の配置を工夫することもよりよい対話を生み出すためには必要なことだと考える。 ・今の学習が社会や生活とつながっていると実感させる授業を展開してほしい。	
	基礎学力の定着	○学力向上に向けた計画的、効果的な取組の実施及び個への支援手立てと授業改善策の検討 ○学力調査分析事業の活用 ○家庭学習をやり切らせる指導とICT活用による家庭学習の実施	○算数科・国語科単元末テスト通過率	85%以上	算数科81.9% 国語科87.7%		100.0%	A	・各学年の算数科・国語科の単元末テストの「知識・技能」「思考・判断・表現」を平均した結果、通過率は85.3%であった。学力向上に向け、朝の帯タイムの学習を継続して行ったことや、対話を生み出す課題づくりを目指した授業改善などの取組により、目標値に達することができたと考えられる。また、家庭学習として「ドリルパーク」を積極的に活用し、復習に繰り返し取り組ませたことも、目標を達成することにつながった要因だと考えられる。	・目標値に達成してはいるが、国語科の「知識・技能」、算数科の「思考・判断・表現」については、85%を達成することができなかった。朝の帯タイムを活用して課題に応じたアシストシートに取り組ませたり、家庭学習としてドリルパークを配信したりすることで、課題を克服することができるようにしていく。 ・全国学力・学習状況調査の結果を基に、課題の大きかった領域については、各学年でどのような対策を行うことができるかを考える時間を設けた。具体的に考えた対策を基に授業改善を行い、学力の向上を目指していく。また、特に課題の大きな領域については、系統性を意識した指導を行っていくために、前学年のどの単元でのつまづきが大きかったのか、現在の学年ではどのような指導を行うとよいと考えられるかなど、隣接学年で交流する時間を設けるようにする。	○			・児童の学力向上を図っていくことを継続してほしい。	
豊かな心	ふるさとを愛する心身の育成	○生活科、総合的な学習の時間を中心とした地域人材・地域教材を活用した授業を推進し、地域への愛着・感謝の心を育てる。	○学校アンケート「小泉の地域の役に立つ行動がしたい」肯定的評価4の児童の割合	85%	84.0%		98.0%	B	・アンケート「小泉の地域がすきですか」に対して、肯定的に評価している児童は84%であった。 ・幼稚園、1・2年生が民生委員の方々や保護者の協力のもと、「さつまいも苗植え」を行ったり、生活科の中で地域の方々や保護者の協力のもと田植え体験等を行っている。また、総合的な学習の中で5年生は「里芋の観察等の農業体験」で地域の方を講師として学習活動を行っている。地域の方々や保護者の方々の力が支えとなった学習活動が成果につながっていると考える。	・今後も、「いもほり」や「稲刈り体験」、「農業体験」等地域人材・地域教材を活用した授業を積み重ねていく。また、小泉の地域の一人としてできることを自分事として考えさせたり、表現する場(行動する場)を設定したりして地域への愛着・感謝の心を育て、自己有用感の向上にもつなげていく。	○			・体験学習や地域教材を活用する等、地域のよさを有効に活用してほしい。 ・体験の中には、うまくいかないことを体験させることも必要である。そこからどうしたらよいか考えさせていくことで、新たな学びや資質の向上につながっていくと考える。 ・相手の心を大切に思う児童を育ててほしい。	
	児童の自己有用感の醸成・チャレンジする心の育成	○「小泉小5つの宝」(①ほかほか言葉②時間を守る③トイレのスリッパ揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行)の児童による取組推進及び改善実施 ○ハイパー・QUや定期アンケートの評価による成果と課題把握、分析、改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパー・QU(6月中旬、1月下旬)分析による学級生活満足群の割合で評価	85% 60%	97.5% 72.5%		114% 120%	A A	○重点項目に「気持ちのよいあいさつ」、「ほかほか言葉を使う」を設定し、毎学期の強化週間の他、児童会から毎月出される生活目標で学校一丸となった取組を行った。強化週間後に行った児童アンケートにおける肯定的評価は、「気持ちのよいあいさつができた」が95%、「ほかほか言葉を使うことができた」が100%であった。 ○第1回ハイパー・QUにおいて、学級生活満足群の割合は72.5%であった。各学年の詳細を見ると、目標よりも大きく上回る学年と、目標を大きく下回る学年の差が顕著となっている実態があり、学校目標の数値に依らず、各学年で、個別最適な支援や取組が必要であるとされる。	○現在は強化週間以外の期間においても、学級担任が中心となって学級児童へあいさつやほかほか言葉の大切さを呼びかけており、意欲的に児童は取り組んでいる。これを教員主導ではなく、児童会を中心とした児童主導の活動へ移行させていき、自分たちで学校生活を盛り上げていくという意識のもとで活動を行うことで、より一層5つの宝を意識した生活ができるように指導を行っていく。 ○満足群に属していない児童の実態把握と、交流を通じた情報の共有を行うことで、当該児童に対して学校にいる全ての教員が支援・指導を行っていく。また、学級内で児童が輝ける場を多く設定し、どの児童も自己有用感を得ることができるような環境を実現できるように指導を行っていく。	○			・よりよい人間関係をつくるためのコミュニケーションスキルを向上させてほしい。	
健やかな体	運動意欲の向上	○アンケートの結果分析による課題分析をし、取組内容の決定と実施 ○体育科における運動遊びの実施 ○休憩時間等を活用した学級遊びの取組実施	○運動やスポーツが好きな児童の割合	7月 80% 12月 90%		91.0%		#####	A	○「運動やスポーツをすることが好きですか」の肯定的評価は91%で、前年度末のアンケート結果から数値が4%向上した。今年度、毎週実施しているがんばり朝会の中で、月に一度、保健体育委員会が企画した運動遊びを行う取組を行った。異学年の児童と一緒に体を動かす中で、児童が運動することの楽しさを味わうことができたのではないかと考えられる。	○がんばり朝会で運動遊びの取組を継続していく。児童が様々な運動を経験し、楽しみながら体を動かすことができる機会を確保していく。 ○夏休みに、職員対象に運動遊び実技研修を行った。また、運動領域ごとに分けた「小泉小運動遊び例」も各学年に1部ずつ配付した。それらを、体育科の授業冒頭で行う運動遊びや、学級遊びを行う際に積極的に活用しながら、学校全体で取り組み、体を動かすことが楽しいと思う児童を育成する。	○			・感染症対策をとりながら、体を動かすことを楽しむ機会を継続してほしい。 ・朝の時間や休憩時間等を効果的に使って、体を動かす機会をもっているのがよい。継続してほしい。
	体をつくる	○給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようと努力する児童の育成 ○食に対する感謝の気持ちを醸成する指導、取組実施	○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価	90%以上	95.0%		#####	A	○「給食は自分で決めた量を食べていますか」の肯定的評価は、95%で昨年度末より4%向上した。6月に保健体育委員会が完食スタンプラリーを企画し、児童が最も苦手な食材ゴージャが出る週に実施した。また、取組期間に合わせて、担当が食材や料理の栄養や効能等についての話やクイズのスライドを作成し、給食中にmeetで放送した。その結果、「完食の意識が高まった」児童は98.9%、「完食を達成できた」児童は80.9%だった。また、ゴージャチャンプルーの残食率は昨年度25.23%から3分の1の8.65%に減少したため、取組の効果は高かったと考えられる。	○11月に2回目の完食の取組を行い、スライド作成と発表を児童が担当して実施するように計画し、自分で決めた量を食べることが出来るよう継続して取り組む。 ○命や作ってくださる方への感謝の気持ちを醸成する取組として、食育指導の中で、調理員さんや栄養士さん、農家の方など給食に関わっている方の思いを伝えたり、バランスよく食べることの大切さを伝える取組を引き続きおこなう。	○			・高学年を中心に自主的な活動となるよう工夫した取組を行っている。 ・今後も食育の推進を図っていくことを期待する。	
信頼される学校	発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りの発行	○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思われませんか」の肯定的評価	90%以上	98.0%		#####	A	・学校便りは毎月発行し、すぐで保護者に配信している。保護者を通して地域へも発信しているが、2か月まとめて取組となった月もあった。 ・「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思いませんか」のアンケートに対して肯定的評価は98%であった。日々丁寧に取り組んでいることの成果だと捉えている。	・今後も定期的な発行を継続し、児童の様子を保護者に発信していく。 ・学年便り等でも児童の具体的な姿を発信したり、学級懇談会でも学校の取組や児童のがんばり等を伝えたりして、保護者との連携を大切にしながら日々の教育活動を進めていく。	○			・保護者・地域との連携を大切に日々取り組んでいる。 ・地域の力(人・自然等)を学校教育活動と連動させて大きな成果へとつなげてほしい。	
	信頼される学校づくり	○学校経営会議を核としたベクトルを揃えた取組実施 ○各部会(研究推進部、生徒指導部、保健体育部)における進捗管理とPDCAサイクルの活用による改善策の検討実施 ○担任者会における教職員の交流による取組の円滑な遂行 ○学校経営会議、三部会等を活用、教員の業務改善案を取り入れた業務改善の推進	○「1年のうち1月における時間外在校等時間が45時間を超える月数6月以内」の職員の割合	100%	85.0%		85.0%	B	・4月、6月において時間外在校等時間が45時間を超える職員が4名、8月を除くその他の月において時間外在校等時間が45時間を超える職員が2名いる。時間外在校時間数については、少しずつではあるが減少傾向にある。教職員の体調や業務内容等を見ながら改善を図っていかなければならない。 ・他の業務や研修等と重なったりして、担任者会の設定や時間が十分とることができていない。	・主任層や見通しをもちながら各部会で相談しながら業務にあたり、声を掛け合ったりする雰囲気があるのは小泉小の強みである。この強みを今後も継承していきたい。 ・保健体育委員会等、教職員の状況を互いに把握したり改善できることはないか考えたりして、組織力の向上にも取り組んでいく。	○			・現状をみながら、改善できることはないかという視点をもって子どもと向き合う時間の確保に努めてほしい。(会議を減らす等) ・今後も、教職員が生き生きと協力しながら働く職場であることを期待する。	

【J:自己評価 評価】  
A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100  
C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【I:学校関係者評価 評価】  
イ:自己評価は適正である。 ロ:自己評価は適正でない。  
ハ:分からない。